

ジャック・デリダ「限定経済から一般経済へ——留保なきヘーゲル主義」を読む

(『エクリチュールと差異』谷口博史訳、法政大学出版局、2022年、529-588頁)

Jacques Derrida « De l'économie restreinte à l'économie générale : Un hegelianisme sans réserve », *L'écriture et la différence*, Seuil, 1967.

2023年6月28日 西山雄二 (東京都立大学)

※ デリダの引用については、谷口博史訳、2022年版の頁数を記す。訳語は変更した場合もある。便宜上、段落ごとに小見出しを付けて、番号を付した。波線はとくにデリダ独自の解釈や介入について示す。

ヘーゲルは自分がどの程度まで正しいの分からなかった。——ジョルジュ・バタイユ
Il [Hegel] ne sut pas dans quelle mesure il avait raison. (G. BATAILLE)

1. ヘーゲルの明証性を担うこと (529-530)

「しばしば、私にはヘーゲルが明証であるかのように思える。だが、この明証は担うには重い。
Souvent Hegel me semble l'évidence, mais l'évidence est lourde à supporter」(『有罪者』出口裕弘訳、216頁)

・ヘーゲルの明証性をいとも軽々と担うつもりの人々がいる。バタイユの最良の読者たち〔「新しい神秘家」を書いたサルトル〕も含めて。

「いくつかの基本概念を小声でほめかしたり、慣例で満足したり、テキストに対し目をふさいだりニーチェやマルクスに応援を求めたりすることでその強制を十分解体できる」(529) といったヘーゲル読解の欺瞞 → あえて軽視したがるほど、ヘーゲルの明証性は担うには重すぎるから。

Cf. 「私たちの時代は、論理学によるにせよ認識論によるにせよ、マルクスによるにせよニーチェによるにせよ、あげてヘーゲルから離脱しようと試みている」。(フーコーによるコレージュ・ド・フランス就任講演『言説表現の秩序』、1970年)

そう誤読する人々は、知らないまま、見えないまま、ヘーゲルの明証性のなかに身をおいてしまう。

Cf. 「死を担い、死そのもののなかで自らを維持する生、それこそが精神の生 *la vie qui porte la mort, et se maintient dans la mort même, qui est la vie de l'esprit.*」(『精神現象学』序文)

・ヘーゲルの明証性はついにそのすべての重みを発揮するときに、かつてないほど軽くみえる。

バタイユの危惧：「それは引き続きいっそう重たくなっていくだろう。」

「ニーチェはヘーゲルに関しては、型通りの通俗的解釈ほどの知識しかもっていなかった。『道徳の系譜学』は主人と奴隷の弁証法に対する現在の、そして将来も続くであろう無知を証し立てる奇妙な証拠である。ところが、この弁証法は恐ろしいまでに炯眼 *lucidité* なのだ……人間の継起する諸可能性を決定し限定するこの運動を把握しないかぎり、誰も自己に関して何も知ることはない。」(『内的体験』)

2. 理性の眠り (530-531)

・ヘーゲルの明証性を担うこと：怪物どもを生みかつ眠らせる「理性の眠り」をあらゆる意味で通過

しなければならない。

理性の眠り *le sommeil de la raison* : 眠り込んだ理性ではなく、理性の形式をもった眠り、ヘーゲルのロゴスの警戒状態のこと。 *ce n'est peut-être pas la raison endormie mais le sommeil dans la forme de la raison, la vigilance du logos hegelien.*

「理性の眠りのなかで受け取られた明証性は覚醒という性格を失う」(『体験』)

「私が何かを見るための条件とは死ぬことであるだろう。」(バタイユ)

・目を開くためには理性とともに夜を過ごし、理性とともに徹夜し、眠らなければならない。夜を徹して朝まで、別の薄暮に至るまで。日没 *tombée du jour* と夜の訪れ *tombée de la nuit* が瓜二つで似ているように、哲学的動物がついに眼を開く時刻に似ている。

Cf. 「ミネルバの鼻(ふくろう)は黄昏時に飛び立つ」(ヘーゲル『法哲学』序文)

ミネルバ=知恵の女神 / 鼻=知恵を象徴する動物

現実世界が完成した後、最後に哲学が時間のなかに現れて、過ぎ去った時代を概念把握する。

・哲学は自己を完成させつつ、哲学の彼方のあらゆる形象を、哲学の外のあらゆる形式と資源を自己のうちに包含し、先取りし、自己の傍らに引きとどめてしまう。

→ しかし、ある種の「笑い」という例外?

3. ヘーゲルを笑う (531-532)

・哲学(ヘーゲル哲学)を笑うこと——それこそがまさに覚醒の形式なのだが——は「訓練」の全体、ある「瞑想の方法」の全体を必要とする。かの哲学者の道を探査し、その駆け引きを理解し、その狡知と渡り合い、その手札を操作し、彼にその策略を展開させ、そしてそのテキストを我が物にしてしまう。→バタイユによれば、哲学とはまさしくこうした労働。

Cf. バタイユ的な哄笑

ベルグソン: 笑いは純粋な知性に働きかけながら、心の一時的な麻痺を必要とする。社会的懲罰

バタイユ: 笑いは「世界の根底」の認識のなかに魂も心も飲み込まれてしまう状態。

予め仕組まれた「喜劇的なもの」を暴力的に払拭する笑い。笑いはモラルではない。笑いとは一種の啓示である。尺度の不在である笑いによって、神を笑うこと。笑いは神の不在に匹敵。

・この労働の果てに爆発する笑い: 特権的瞬間というよりも運動

バタイユが瞑想する「不可能なもの」が有する形式(532):

哲学の言説を汲み尽くした後、かつて哲学の言語であったもののなかに、哲学という共通の論理が支配してきた概念対立を超過するものを、いかにして書き込めばいいのか。

・ヘーゲルとの対決: 一世紀あまり続く、断絶、「転倒」をともなう/ぬきの「克服」« *dépassements* » avec ou sans « *renversements* »

① 留保なき共犯性がヘーゲルの言説につき従い、哲学の形式に異議を唱えることなく、その言説を最後まで「真面目にとらえる」。

② ある爆笑 *un certain éclat de rire* がヘーゲルの言説を超過し、その意味を破壊し、言説それ自体を解体させるような「経験」の先端を指し示す。

→きちんと照準を合わせ、自分が何を笑っているのかを知っているからこそ可能な技法

4. ヘーゲル思想の内的厳密性とさまざまな相貌 (532-533)

バタイユはヘーゲルを、絶対知を真面目に受け取った。

→ヘーゲルの概念や命題を彼の体系内で理解しようとした。

「ヘーゲルの思想の数々は固く結び合わされているので、その一貫性としての運動の必然性において捉えるのであれば、その意味を捉えることはできない。」(『体験』)

ヘーゲルの理性における連鎖の理念や意味を問いに伏せながらも、この理性の内的な厳密さを承知しながら、その全体性そのものを思考した。

ヘーゲルの異なったさまざまな相貌 (534) : 「絶対的な引き裂き *le déchirement absolu*」を引き受けるヘーゲル……「発狂すると信じた」ヘーゲル……「喜劇的なささやかな要約 *la petite récapitulation comique*」のヘーゲル……。

5. バタイユとヘーゲルの諸概念の関係 (534-536)

・「バタイユの概念をひとつずつ取り出し、それを構文の外で固定してしまえば、概念はどれもみなヘーゲル的なものになる。」(534)

→バタイユはそれらの概念に振動を与え、概念そのものにはほとんど手を付けていないが、それらを新たな布置のなかに移し替え、記入し直している。

あの断固たる法則——バタイユは必ずや哲学的でない仕方で表明したであろう——が、バタイユの諸概念とヘーゲルの諸概念の関係を束縛し、形而上学の全歴史と関わるように束縛させる。

意味の時代——支配と至高性 *L'époque du sens : maîtrise et souveraineté*

6. 支配と隷属の問い (536-537)

・ 主人性=支配 *maîtrise, Herrschaft* (『精神現象学』) とは至高性 *souveraineté* のことか。

主人性=支配とは、「いかなる特定の定在にも、定在一般の普遍的な個別性にも、ひとはつなぎ止められていないことを示す」¹である。

→支配の「作用 *opération*」(『精神現象学』における Tun の訳語) とは、自己自身の生の全体を危険にさらす=賭けに投じる [*mettre en jeu, wagen, daransetzen*] こと。

・ 奴隷：自分の生を危険にさらさない者、生を維持しようと望み、維持され (*servus*) たいと望む者。

・ 生を越えて立ち、死を正面から凝視することによって、ひとは主人性=支配へと到達する。すなわち、対自、自由、承認へと至る。自由は生を危険にさらすこと (*Daransetzen des Lebens*) で得られる。主人とは死の苦悩を耐え、死の営み *œuvre* を保持する力をもっている者。

→バタイユにとってのヘーゲルの中心：『精神現象学』序文における、知を「死の高み」におく箇所。

7. 支配と至高性との差異 (537-539)

・ ヘーゲルの「支配」とバタイユの「至高性」の差異：意味との差異、意味をある種の非—意味から隔てる比類のない間隔 *la différence du sens, l'intervalle unique qui sépare le sens d'un certain non-sens.* (538)

・ 支配：生を賭けること；自己意識と現象性の歴史にあつて、換言すれば、意味の展開の歴史にあつ

¹ 「自己を自己意識というまったくの抽象作用であると述べるのが成り立つのは、自らを自己の対象的な姿のままき否定として示す点においてである。言いかえれば、いかなる一定の定在にも結び付いていないこと、定在一般という一般的な個別性にも、生命にも結び付いていないことを示す点においてである。」(『精神現象学 (上)』、平凡社ライブラリー、224 頁)

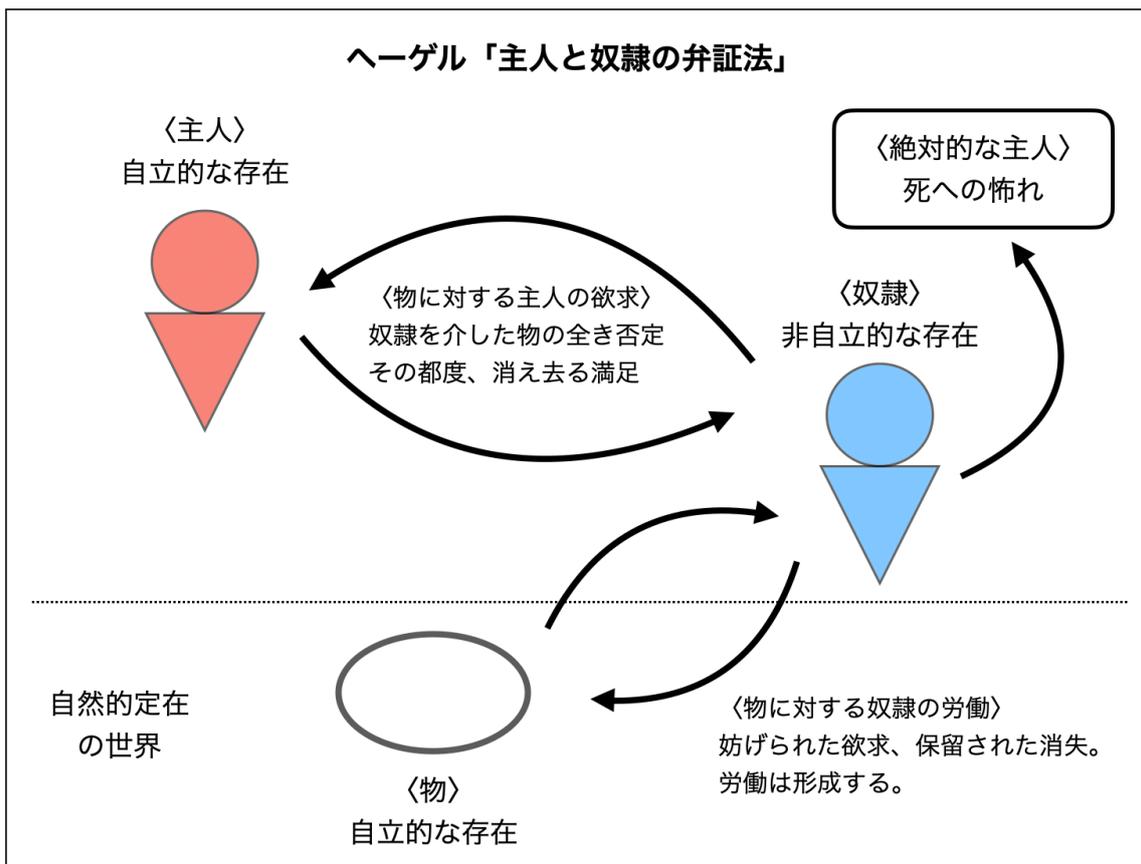
ての、ひとつの不可欠な段階；「主人」がみずからの真理を試練にかける。le maître éprouve sa vérité.
 そのための分離不可能な二つの条件：

- ① 自分の生を賭けて獲得したものである以上、「主人」はこの生を失うわけにはいかない。
- ② 弁証法的連鎖の果てにおいて、「自立した意識の真理」は「隷属的意識」となる。
 → 「隷属性」こそが「主人性」に転化。「支配」となった「隷属性」は自身のうちに、抑圧されたその起源の痕跡を保持していたことになるだろう。Et quand la servilité deviendra maîtrise, elle aura gardé en soi la trace de son origine refoulée. 「抑圧された意識 conscience refoulée, zurückgedrängtes Bewusstsein」(ヘーゲル)。「主人」の真理は「奴隷」のうちにある。そして、「主人」となった「奴隷」は「抑圧された」奴隷であり続ける。これこそが意味、歴史、言説、科学などの条件である。

Cf. フロイトの抑圧 Verdrängung, refoulement

抑圧、痕跡、欲望、保留、制止、遅延といった問題系（「フロイトとエクリチュールの舞台」）

- 「奴隷」は〔主人とは異なり〕享受という方法で「物」の本質性を否定できない。
- 「物」に対して労働し、これを「錬成させる élaborer, bearbeiten」だけ
- 自分の欲望を抑制し réfréner, hemmen、「物」の消滅を延期させる retarder, aufhalten。
- 生を保持すること、生き続けること、労働すること、欲望を延期すること、危険な賭けを制限すること、死を正面から見つめるまさにその瞬間に死を制止すること。



8. 生のエコノミー (539-540)

主人が危険にさらした生を保持するという「生のエコノミー économie de la vie」=ヘーゲル弁証法 (539)

「廃棄しつつ、廃棄されたものを保存し保持する、また、そうすることによって、廃棄された後にも生き延びるような、意識の否定」「こうした体験を通じて自己意識は、自分にとって「生」が純粹自

己意識にも等しく本質的なものであることを学ぶ。」

≠「抽象的否定性」としての死（ヘーゲル）：純然たる死、収益なき無言の死 *cette mort muette et sans rendement*。

9. ヘーゲル哲学と笑い（539-542）

「バタイユの笑いが響き渡る *Éclat de rire de Bataille*.」（539）

・自然な生 *la vie naturelle* / 本質的生 *la vie essentielle*

本質的生 = 自然な生に溶接され、これを保持して、自己意識と真理と意味の構築のために働かせる。

「資金を手元に残し、賭けの主人であり続け、賭けを制限し、賭けに形式と意味を与えて、賭けに対して労働すること」 = 止揚

「生のエコノミー」は、意味や自己を保存し、循環させ、再生するだけ。

→ 主人の弁証法的な労働状態が喜劇と化し、笑うべきものとなる。

笑いのみが弁証法と弁証法を操る哲学者を超過する。

意味の絶対的放棄、死の絶対的危険、ヘーゲルが「抽象的否定性」と呼ぶもののあとで爆発する笑い。

→ 「否定性は決して生じることがなく、けっして現前することがない。Négativité qui n'a jamais lieu, qui ne se présente jamais...」「笑いの方も、文字通り、けっして現出するものではない。Rire qui à la lettre n'apparaît jamais...なぜなら、笑いは現象性一般を、意味の絶対的可能性を超過するからである。」（540）

→ 笑いの差延的效果

・「主人性」と「至高性」の差異

爆笑は「支配」と「至高性」の差異を見せる *montrer* こともなく、ましてやこれを語る *dire* こともなく、輝かせる *faire briller*。

「至高性」は現象学的連鎖にとらえられた一形態ではない。その絶対的変質。

笑いとは自己を笑うもの：ある「高次な」笑いがある「低次な」笑いを笑う。爆笑とはほぼ無なるもの、意味の絶対的な崩壊。笑うべきは意味の明証性への従属すること。

笑いに基づく哲学 ≠ 労働としての哲学：ヘーゲルの体系には笑いが不在

Cf. ヘーゲルにおける笑い：『美学』や『精神現象学』における喜劇論

・「*Aufhebung* という観念が笑うべきものであるのは、それが息切れする言説の忙しなさを意味しているからだ。この言説は息を切らして、あらゆる否定性を再我有化し、賭けへの投入を投資へと洗練させ、絶対的浪費を弱め、それと同時に非-意味の無-底〔*sans-fond*〕には目をふさごうとする。この無-底において、意味の蓄え〔*fonds*〕は汲み取られ、尽き果ててしまう。」（542）

→ ヘーゲルは、聖なるものの体験、現前性と意味の死に狂おしい供犠に対してまったくの盲目。

10. バタイユ「ヘーゲル、死と供犠」からの引用3点（543-546）

偽装 *simulacre* と策略 *subterfuge* の強調だけがバタイユとヘーゲルの連続性を断ち切っている。

・〈否定的なもの〉（= 死）を現わすことが重要。自然的・動物的な存在の死が、〈人間〉に自分自身を明示する。しかし、この死は明示されない。

・人間は生きながら——自分が存在しなくなるのを見つめながら——死ななければならない。死それ自身が、意識的存在を無化するまさにその瞬間に、（自己）意識にならねばならない。

・供犠：供犠執行者は、死にみまわれる動物と自己同一化する。自分自身の意志で、供犠の凶器に共感を覚えつつ、自分が死ぬのを眺めながら死んでゆく。＝喜劇

・スペクタクルの必要性、一般的に言えば、表象の必要性：死についての虚構ほど非動物的なものはない。

・原則として、人類は意識的に「死を前にして恐怖でしりごみする。」

・ヘーゲルにとっては、あるがままの〈否定性〉を意識化するということが、つまり、〈否定性〉の恐怖を、この場合は死の恐怖を理解する——それも死の業に耐えこれを正面から見据えながら——ということが本質的なことだった。

・アイルランドやウェールズの古い習慣「通夜」：家の栄えある場所に、棺を開けたまま、立てかけておく。死者は一番立派な服を着せられ、シルクハットをかぶせられる。家族の者はすべての友人を招待し彼らは長いこと踊り、死者の健康を祝して大量に酒を飲む。

一人の他者の死→死それ自体のイメージ

他者である死者が饗宴に賛成しているとみなされているが、酒を飲んでいる自分も将来死者となったときには、今の死者と同じように理解されるだろうという条件で皆楽しむ。

・陽気さが死の業に結びついて、私に不安を与え、その不安によって陽気さがいっそう増大し、その陽気さのためにまた不安がいっそう激しくなる。こうしてついに陽気な不安、不安な陽気さが、熱さと寒さが交錯するうちに、「絶対的な引き裂き」を与えるのである。この「絶対的な引き裂き」というのは、ほかでもない私の喜悦が私を引き裂いている状態なのであり、また、私が極限まで、際限なく引き裂かれていないのだったら、喜悦の後に衰弱が続いてしまうような状態である。

11. 留保なき否定性 (546-548)

・ヘーゲル哲学には盲点があって、その周囲でこそ意味の再現前化が組織されうる。破壊、消滅、死、供犠があまりにも不可逆な消費を、あまりにも根元的な——この場合、留保なき、と言うべきか——否定性を構成するため、ある過程や体系の内部における否定性と規定しきれなくなる。(546)

ヘーゲルの操作：否定性 *négativité* がつねに実定性 *positivité* (肯定性) の裏面として留保されて、弁証法の動力となる。

至高の操作：否定的でもなく実定的でもない留保なきの地点 *le point de non-réserve* を核とする操作

→カントやヘーゲルは否定性についてのもっとも恒常的な哲学的規定を呼び起こし、明らかにしただけ。否定的なものを真面目にとらえた。否定的なものの労苦に意味を与えた。「彼 [=ヘーゲル] は自分がどこまで正しいのかわからなかった。」(本論冒頭の銘)

Cf. 「おそらく、現代の哲学は、実定的ならざる肯定 [*une affirmation non positive*] というものの可能性を発見することによってあるギャップを創始したのであり、その唯一の等価物はカントによってなされた「否定による無 [*nihil negativium*]」と「喪失による無 [*nihil privativum*]」の区別——この区別が批判的思考の歩みを開いたことはよく知られている——のうちに見出されるだろう。」(フーコー「侵犯への序言」、1963年)

カント『純粹理性批判』、先験的分析論の末尾における四種類の無(「思惟物 [*ens rationis*]」および「想像物 [*ens imaginarium*]」)としての無、「喪失による無」、「否定による無」)

・「喪失による無」：何か実在するものの否定。例：実在物の具体的な形姿を欠いた影や、熱を欠いた状態である寒さ。「概念に対する空虚な対象としての無」

・「否定による無」：自己矛盾するような概念の対象のこと。例：「二直線で囲まれた図形」

妥当性を欠いた概念として自己否定してしまうため、自らに対応する現実的な対象をもたない不合理

なもの、不可能なもの。「概念をもたない空虚な対象としての無」

・バタイユは否定的なものを真面目にとらえない。(547)

「絶対的引き裂き」と否定的なものとの「果てまで」、「尺度」も留保もなく赴くこと。

論理、Aufhebung、Erinnerung（記憶）ではない。否定的なものの表面、否定的なものを肯定的なものの心安らぐ裏面にするものを痙攣的に引き裂くこと。否定的なものは働くことなく、「否定的なものの労働」として臨検されるがままにはならない。

「ヘーゲルはこのことを理解することなく理解し、それを隠しながら示した。」(548)

・欠陥なきその一貫性を尊重しつつも、ヘーゲルのテキストがいくつもの層からなることを明らかにし、テキストがテキスト自身を解釈していることを示すことができる。Tout en respectant sa cohérence sans défaut, on peut en décomposer les strates, montrer qu'il s'interprète lui-même. つまり、いかなる命題も解釈学的決断のもとにおかれた一個の解釈となっているのである。

→ヘーゲルにおいては、賭けや幸運の可能性が無化されている。

意味の労働ないし労働の意味は知との関係においてではなく、記入との関係において包括される。意味は賭けの関数としてあるもので *le sens est en fonction du jeu*、意味などもたない賭けの構造のいずれかの場所に記入されている。

12. 転位 déplacement (549)

ヘーゲル自身の解釈を——ヘーゲルに抗して——再解釈すること (549)

「ヘーゲルの態度は、学問的意識を、言説的思惟の際限ない整合的構成を、供犠にみられる素朴さに対立させているけれども、しかし実際のところ、かかる意識、かかる整合的構成には、やはりまだ一箇所、曖昧なところが残っている。ヘーゲルがそうした供犠の「瞬間＝契機」を見誤ったとは言えないだろう。この「瞬間＝契機」は『精神現象学』の運動全体のなかに含まれ、組み込まれているのだから。『精神現象学』においては、人間が死の〈否定性〉を引き受ける限り、この〈否定性〉は人間的動物を人間たらしめているのである。けれども、ヘーゲルはただ供犠のみがこの死の運動全体を表わしているということを見て取らなかったのだ。それだから、『現象学』の序文で叙述された最終的——かつ〈賢者〉に特有の——経験が何よりも端初の、しかも一般的な経験になってしまったのである。ヘーゲルは自分がどの程度正しいのか分からなかった——いかなる正確さで〈否定性〉の運動を叙述していたのか、分からなかったのである。」（「ヘーゲル、死と供犠」、『純然たる幸福』、ちくま学芸文庫、219頁）

13. 弁証法のなかで弁証法を瓦解させる至高性 (549-550)

至高性は弁証法、歴史、意味の運動を断ち切るのではなく、理性のエコノミーにその境位、場、無際限に広がる非一意味の縁取りを与える。弁証法的総合を削除するどころか、これを意味の供犠内に記入し機能させる。(550)

≠「バタイユはヘーゲルの三位一体から、総合の契機を削除する。」（サルトル）

至高性はさらに主人性＝支配を、死の意味の呈示 *présentation* を犠牲に供さなければならない。

→言説（論証的な意味作用）の可能性を瓦解させること。断絶、切断、傷口（つまり抽象的否定性）を言説の内部にもたらすだけでなく、こうした開口部を通じて、突如として言説の限界と絶対知の彼岸を見い出すような侵入によって。

14. 有意味な言説／詩的な言葉 (550-552)

・ 有意味な言説 discours significatif / 詩的、恍惚的、神聖な言葉 parole poétique, extatique, sacrée
という二つの次元の対立？

→ 詩的な言葉とはもうひとつ別の言説のことではない。ヘーゲル的な言説内での侵犯

詩的なものや恍惚的なものは、あらゆる言説のうちにあつて、その意味の絶対的喪失、神聖なるもの、非一意味、非一知、賭けの(無)底に、意識の喪失に開かれうるもの。 詩的なものや法悦的なものはこうした意識の喪失から骰子一投によって覚醒する。(551)

・ 詩にまつわる現代的な危険：

至高の言葉は「死が主題と意味を放棄する瞬間 le moment où la poésie renonce au thème et au sens」(『瞑想の方法』)に予告される。だが、「規則なき遊戯」に委ねられ、飼い馴らされ、「従属」させられ、「同化」させられてしまう。

→ 詩は「至高性の肯定を伴い」、「自らの意味が不在であることについての注釈」を「与え」なければならない(バタイユ)。「[...] la poésie doit être « accompagnée d'une affirmation de souveraineté », « donnant » [...] « le commentaire de son absence de sens ».

「笑い、酩酊、供犠、詩、エロティシズムそのもの、これらはある条件内で自律的に、あたかも家族のなかの子供がそうであるように、一定領域内に挿入された状態で存続する。」(同書)

従属、同化 insertion、至高性の間隔：シュルレアリズムとの対決を通じたバタイユの文学と革命の関係。

「既知から未知へと通じている」という詩的イメージ≠従属

15. 哲学史的な賭け (550-552)

哲学の歴史に溶け込んでいる命題：言説は意味の現われである限り、至高性の喪失そのもの。それゆえ、隷属性とは意味への欲望。

バタイユ：思考不可能な非一意味の無底についての告発を切り離して、これを強大な賭けに投じた。

≠ 弱小な賭け：意味の不在に対して言説内で意味を付与すること

Cf. バタイユにおける「笑いの神性 la divinité de rire」(O.C. VI 『有罪者』 出口裕弘訳)

・ 「私は偶発事を前にいつも後ずさりしてきた。私は恐怖していた、自分がまさにそうであるところのもの、すなわち笑いそれ自体を。」(334/183)

・ 「ヘーゲルは労働の哲学を練り上げて(『精神現象学』では、従僕、解放奴隷、労働者こそが神となる)、好運を廃棄し——笑いを廃棄した。」(341/198)

・ 「笑いとは不可能なものなかへの可能なものの跳躍——そして、可能なものなかへの不可能なもの跳躍である。しかし、それはひとつの跳躍でしかない。それを維持しようとするれば、不可能なものを可能なものへと還元することになるだろうし、また逆もしかりである。」(346/206-207)

・ 「人間の生は明晰さ lucidité に結ばれている——外部から与えられるのではなく、それとは反対の条件下で獲得された明晰さに——自分自身の絶え間ない異議申し立てからなり、最後には、笑いのなかに(非一知のなかに)解消される明晰さに結ばれているのだ。」(347/209)

・ 「笑いのなかで恍惚は解放され déliée、内在的である。恍惚の笑いは笑わない。そうではなくて、それは私を無限に開くのだ。」(348/211)

・ 「ヘーゲルを読むと、私の傷口も、笑いも、「神聖なる」淫蕩も場違いなものにみえてくる。しかしながら、これらだけが、人間を人間自身に集約しようとする努力に見合ったものなのだ。」(351/215-216)

- ・「ヘーゲルがいなかったら、私はまず自分がヘーゲルにならなければならなかつたろう。しかも、私にはそうなるための手段は欠けている。個別的に思考するという方法ほど私に無縁なものはない。私のなかで、個別的思考への憎悪は平静さ、単純さの域に達しているのだ。」(353/221)
- ・「笑いはただ、人間一般を絡み込んでいる自然だけを否定するのではない。大部分の人間をいまだに絡み込んでいる人間の悲慘をも否定するのだ。」(362/238)

二つのエクリチュール

「これらの判断は沈黙へと導くはずだったのに、私は書いている。これは少しも逆説的なことではない。Ces jugements devraient conduire au silence et j'écris. Ce n'est nullement paradoxal.」(554)

16. 発話と沈黙 (554-555)

至高性の意味ではなく、その非一意味の可能性をなおも保持するために、沈黙を意味する言葉を見出さなければならない。

「私が語った以上、沈黙は破られていもう。ことはつねにある種のラマ・サバクタニで終わり、黙ることができないという私たちの無力を叫び立てる。」(『瞑想の方法』)

lamma sabachtani「神よ、どうして私を見捨てたのか」(マルコ福音書 15-34)

沈黙は発話や意味の不在ではなく、非一意味の語り。

至高性はまた、この横滑り *glissement* を利して、紛れもなく意味のなかで意味を、言説のなかで言説を裏切ることができる。

17. 至高性に向けた言説の横滑りの危険 (555)

意味づけを正当化してしまうことの危険。理性を、哲学を、そしてヘーゲルを正当化してしまう危険。言語を二重化しなければならない。策略、シミュラクル、仮面に頼る必要。il faut redoubler le langage, recourir aux ruses, aux stratagèmes, aux simulacres. (555)

18. バタイユにおける「連続性」の至高的経験 (555-556)

至高の沈黙：意味作用の源泉たる差異とはある観点からすると異質。

非連続性の抹消、「連続性」の必要≠形而上学が直視するような意味や現前の充実

「連続性の経験は、否定性や消費における底なきものに向けて努力するものでありながらも、同時に絶対的差異の経験でもある。S'efforçant vers le sans-fond de la négativité et de la dépense, l'expérience du continuum est aussi l'expérience de la différence absolue」(556)

≠現前と意味の歴史内労働に奉仕するようなヘーゲル的差異

「ヘーゲルとバタイユの差異とは、この二つの差異のあいだにある差異」

交流、連続性、瞬間 communication, continuum, instant≠現前の成就

Cf. 非一知のある種の現前性、恍惚の主体のある種の現前性

「バタイユの内的経験の冒険は、ヘーゲル流の現前の形而上学からまた別の現前の思考への移行なのではないだろうか。」(岩野卓司「真面目な」バタイユ——バタイユからデリダへの「継承」について、『言語と文化』、第10巻、2013年)

19. 横滑りの地点 (557)

「発見しなければならないものとは、語もさることながら、ひとつのの地点である。それは、古い言

語のなかから取り出されたある語が、その地点に置かれ、この駆動を与えられることによって、自分自身の横滑りと同時に、言説全体の横滑りを開始させることになる道筋のなかの場である。ce qu'il faut bien trouver, c'est, non moins que le mot, le point, le lieu dans un tracé où un mot puisé dans la vieille langue, se mettra, d'être mis là et de recevoir telle motion, à glisser et à faire glisser tout le discours.」(557)

20. 至高の沈黙へと向かう、比類のない関係 (557)

従属的な意味作用／いかなる意味作用をももたない関係

21. 生の賭けと自己統率 (558)

ヘーゲル的な「主人性」もバタイユの「至高性」も、生を賭けにさらす。

ただ、「至高性」は、自身を保持することも、自分を収穫物のように取り入れることも、自己の利益を、言い換えれば、自分の身を危険にさらした分の利益を取り込むことも望んではならない。

至高性≠自己意識。「至高性は自己を統率しないというこの第一の特徴——哲学的論理では読み取りえぬ特徴 ce premier trait — illisible dans la logique philosophique — que la souveraineté ne se commande pas」(558)

22. 主人性と至高性の失敗 (559-560)

主人の失敗：奴隷の媒介に屈して、弁証法に捉えられ、事物や労働に従事する場合。

至高者の失敗：失敗を恐れるのをやめて、自己供犠に身を捧げる場合。

「このほとんど知覚できない差異によって、至高のエクリチュールのあらゆる横滑りは調整されなければならない。この差異が、つねに問題となる至高の自己同一性を毀損＝切開しなければならない。

Elle doit entamer l'identité de la souveraineté dont il est toujours question.」(560)

至高性＝「自己同一性を有さず、自己にあらず、対自にあらず、自己に属することなく、自己の傍らにないもの。」記憶ではなく、「積極的忘却」(ニーチェ)の実践。

22. 二つのエクリチュール (560)

支配のエクリチュール：痕跡を企てるような支配のエクリチュール。生を現前のうちに保持しようとする隷属的企て。

至高のエクリチュール：「このエクリチュールは痕跡を痕跡として生産する。痕跡が痕跡であるのは、その痕跡において現前が、その最初の約束の瞬間からただちに隠され、痕跡が絶対的な消去の可能性として構成される限りにおいてである。消せない痕跡は痕跡ではない。[...] celle qui produit la trace comme trace. Celle-ci n'est une trace que si en elle la présence est irrémédiablement dérobée, dès sa première promesse, et si elle se constitue comme la possibilité d'un effacement absolu. Une trace ineffaçable n'est pas une trace.」(561)

Cf. 痕跡の痕跡、起源の起源

「痕跡はたんに起源の消失なのではない。それがこの場合意味することは [...] 起源は消失したのではなく、反対にひとつの非一起源、つまり、痕跡によってはじめて構成されたのであって、かくして痕跡は起源の起源となるということである。」(『グラマトロジーについて』上巻、123頁)

23. 1) マイナーなエクリチュール：詩的エクリチュールの抹消を命じる。(561-562)

24. 2) メジャーなエクリチュール：言葉と意味の隷属的共犯性を断つ。(563)

25. エクリチュールの空間 (563)

主人性を超過する、賭けへの投入がなされるエクリチュールの空間

「主人にとって、賭けは何ものでもなかった。マイナーなものでも、メジャーなものでも。Pour le maître le jeu n'était rien, ni mineur ni majeur.」（「非一知に関する講演」）

26. 非連続的な差異／交流の連続（563）

秘密の差異の夜：至高な交流の連続体にとっての境位（563）

連続的なものと非連続的なものの対立はつねにヘーゲルからバタイユへと転位する。

27. 記号の隷属性による拘束力（564）

至高性に付与される概念はすべて主人性の論理にしたがったまま。（564）

至高性がいまだ主体の古典的哲学のなかにとらわれている領域はある。

28. バタイユのエクリチュールの読み方（564-566）

主人性の論理と至高性の非一論理を分かち空間は、概念そのものの核心に記入されることなく、エクリチュールの連鎖や機能のなかに記入される。（564）

意味、支配、現存などのロゴスを超越するメジャーなエクリチュール

「哲学的概念が過酷に投げ捨てられ、容赦なく供犠に捧げられていることに目をふさいだままバタイユのテクストを読み続け、「有意味な言説」の内部でそれに問いかけ、判断し続けること」（565）＝バタイユを読まないこと

バタイユのエクリチュール：その強大な審級において形式と内容をの区別を認めない。（566）

≠コジューブが主題としたヘーゲル的〈書物〉 ≠サルトル：形式≠内容

29. 概念の非一意味への横滑り（566）

バタイユにおいて、概念は至高性の契機に、その意味の絶対的喪失に、留保なき消費に関係づけられる。（566）

自己の確実性と概念の安寧とを、こうした横滑りに抗してでも維持し保存しようとする打破しがたい欲望＝哲学者

哲学者はバタイユのテクストに対して目を塞ぐ。

30. 意味の時代のエポケー（567）

バタイユ：意味そのものの還元 ≠現象学的なエポケー：意味への還元

31. 非一知の科学（567-568）

バタイユのエクリチュールは至高な審級（何も従属させないもの）に依存し、随従するのか。

非-関係の関係の創設

根本的変質を被る科学：科学そのものを超過する非一知 *Le non-savoir excédant la science elle-même*

科学主義 *scientisme*／神秘主義 *mysticisme* の枠内に収まらない二重の姿勢 *un double posture* によって、非一知の過剰を思考しうる。（568）

32. 原理や基盤とはなりえない至高性（568-569）

至高性：非一原理にして非一基底。心安らぐ命令、可能性の条件あるいは超越的言説などへの期待からは決定的に免れているもの

ブランショの助言「体験それ自体が権威である。（しかし権威は己の罪を贖わなければならない。）

L'expérience elle-même est l'autorité (mais que l'autorité s'expie).」

33. 非一知と歴史 (569-570)

至高性によって超出されたものは主体のみならず、歴史そのもの前ヘーゲル的で古典的な方法によって、非歴史的意味に立ち帰るわけではない。

「意味の歴史、歴史の意味、そしてこの両者をつねに隠れて溶接していた知の企て、これらの全体を至高性は侵犯する。このとき非一知は歴史外的なものになるか、それはたんに、非一知が歴史の成就と絶対知の閉鎖を認証し、それらを真面目に受け止めたのち、賭けのなかでそれらを超過するか模擬することによって、この両者を裏切ったからである。」(570)

ヘーゲルの「絶対知」／バタイユの「非一知」

「この模擬のなかで、私は知の全体を保存ないし先取りし、私は自分自身を、抽象された、特定の知にも特定の非一知にも限定することなく、それでいて自分自身を絶対知から放免し、あるがままの絶対知をそれ自身の場に置き直す、つまり、絶対知をもはやそれが支配していない空間のなかに位置づけ、そしてその空間のなかに記入する。 Dans cette simulation, je conserve ou anticipe le tout du savoir, je ne me limite ni à un savoir ni à un non-savoir déterminés, abstraits, mais je m'absous du savoir absolu, le remettant à sa place comme tel, le situant et l'inscrivant dans un espace qu'il ne domine plus.」(570)

≠サルトル：非一知は歴史的。ある人物によるある日付の経験によって、歴史内的にしか、非一知は指し示されえないから。しかし、サルトルは知や意味の歴史の側にとどまってしまう。(571 の注26)

一般エクリチュールと一般経済学 L'écriture et l'économie générales.

34. 一般経済学と至高性のエクリチュールの共通点 (570-571)

- ・科学であること
- ・対象を意味の留保なき破壊に関係づけていること

限定経済学：商品価値に限定された、富の使用を対象とする科学

≠一般経済学：過剰なエネルギーの発生、その無用で意味のない消失を解明する経済学

35. 現前しない至高性の効果 (572)

「たしかに、科学的エクリチュールであるかぎり、一般経済は至高性そのものではない。至高性そのものなどありはしない。[...] 至高性は不可能なものである。したがって、それは存在しない。 En tant qu'écriture scientifique, l'économie générale n'est certes pas la souveraineté elle-même. Il n'y a d'ailleurs pas de souveraineté elle-même. [...] La souveraineté est l'impossible, elle n'est donc pas, [...]」(572)

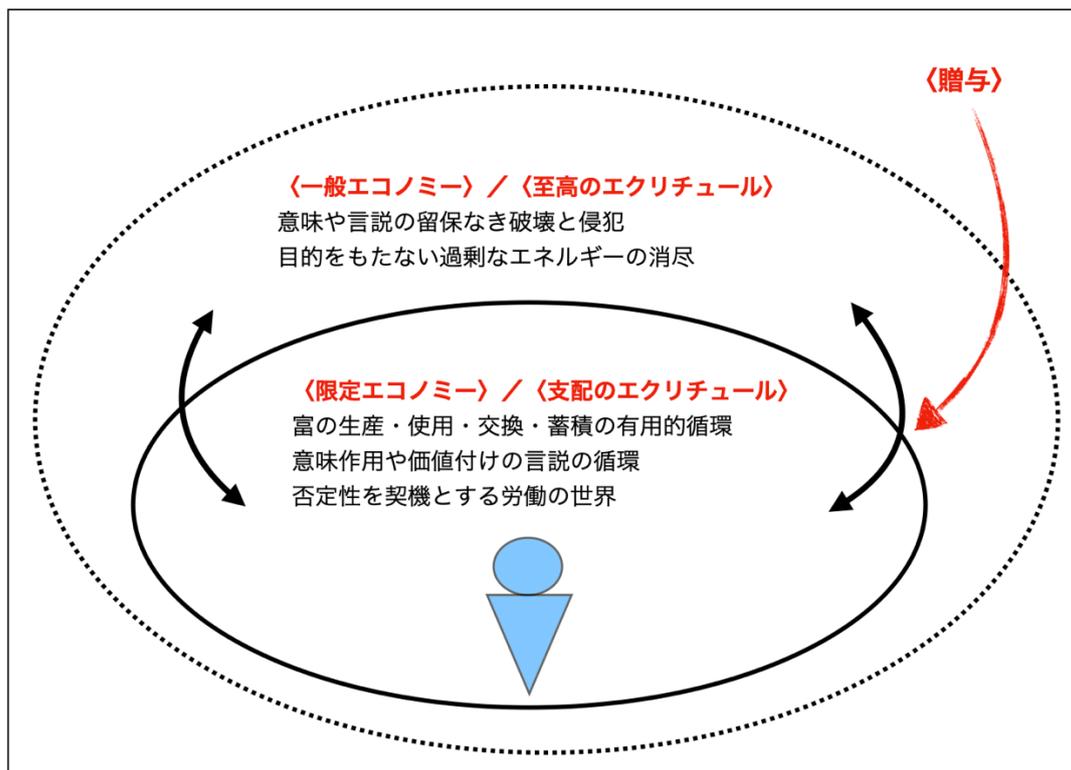
とりわけ真でも、誠実でも、「真摯」でもない。「真でも偽でもなく、誠実でも不誠実でもない。それは純粋に虚構的だ。」(573 の注29)

「至高性のエクリチュールは意味の問いを開く。それが描き出すのは非一知ではなく——そんなことは不可能だ——、たんに、非一知のもろもろの効果でしかない。 Elle ouvre la question du sens. Elle ne décrit pas le non-savoir, ce qui est l'impossible, mais seulement les effets du non-savoir.」(572)

Cf. 「一般的エコノミーは〈エコノミー的なものと非一エコノミー的なものとのエコノミー〉を思考するという逆説的なものになる。」(亀井大輔『デリダ 歴史の思考』、96頁。)

Cf. 「非エコノミー的なものを一般経済に書き込まれたものとして理解しようとするひともいるだろうが、それは一般経済がなおもエコノミーであることを忘れているからであろう。反対に、贈与が一般経済から生じると理解しようとしてはならず、それとは逆に、贈与から出発して、一般経済と限定経済の話へと進まなければならない。一般経済とは贈与と限定経済との関係なのである。つまり、贈与 - 一般経済 - 限定経済という図式になるのだ。」(ダリン・テネフ「デリダにおける贈与と交換 (Derridative)」、『人文学報』、首都大学東京人文科学研究科、511号、169頁。)

Cf. 「デリダによる「エコノミー」概念の捉え方は極めて限定的である。[...] 循環としてのエコノミーは近代的な表象にすぎない。デリダは自己への現前という「現前の形而上学」批判を急ぐあまり、自らが限定エコノミーに囚われているのだ。」(佐々木雄大『エコノミーと贈与』、13頁。)



36. 科学的言説における既知と未知の関係 (572-573)

通常の科学的言説：未知なるものが既知になる関係と方向性。

至高性のエクリチュール：既知のものが未知なるものに関係づけられ、意味が非一意味へと関係づけられる。

37. バタイユの無神学＝無一目的論 (574)

進展する精神の現象学が転倒されるわけではなく、comprise (理解、把握) される。

その知の地平や意味の形象とともに、一般経済学の開けのうちに記入される。

バタイユの無神学＝無一目的論、無一終末論

≠否定神学：存在の彼岸、超一本質性という前提

Cf. 「実際は、バタイユが記述する無の形象はマイスター・エックハルトが「神性」の名の下で指し示すものにきわめて近いことがわかる。」(細貝健司, *Totalité en excès*, p. 212.)

38. 二項対立における捕捉と追放の脱構築的戦略 (575-576)

(精神の)現象学：現象の諸形態を、つねに予告済みの意味についての知へと関係づける。

≡限定経済学：富の利用を扱う科学

差異と否定性を労働（意味の契機と条件）として規定する。

過剰なエネルギー：いかなる目的もなく、いかなる意味ももたずに失われるのみ

至高作用の非—意味≠意味の否定、意味の留保 →実定的なもの／否定的なもの/対立の彼岸

捕捉と追放の脱構築的戦略

「一般エクリチュールの諸概念は、それらが対照的な二者択一の外に追放され、ずらされる場合にのみ、はじめて読み取られる。ところが、それらの概念はこの二者択一のなかに捕捉されているようにみえるのであり、ある意味では、そこに留まらなければならない。」(575)

形而上学の囲いのなかでは無価値とされるもの：価値／無価値の彼方へ

「神秘的なもの」：神秘的なもの／合理的なもの/対立を超えたところへと論証的知を差し向ける。

renvoyer au-delà de l'opposition du mystique et du rationnel. (576)

「内的経験」の意味：完全に裸形で曝されており、外部に向かって開かれ、留保も内的権威もなく、このうえなく表面的。*tout entière exposée — au supplice — nue, ouverte au dehors, sans réserve ni for intérieur, profondément superficielle.* (576)

39. 一般エクリチュールの意味作用 *vouloir-dire* (576)

一般エクリチュールの述語は、何かを言表したり意味するわけではない。概念の産出でもない。

伝統の名称は保持されるが、しかし、メジャーとマイナー、古代的なものと古典的なもの *l'archaïque et le classique* などの差異によって、変質する。

40. 無媒介性／媒介性を越えて (578-579)

「ヘーゲルの精神のなかで、無媒介的（直接的）なものは悪しきものである。そして、ヘーゲルであれば、確実に、私が経験と呼ぶものを無媒介的なものに関係づけたらう。」(『エロティシズム』)

バタイユの内的体験≠無媒介的なもの、絶対的に近い現前性。

哲学において、無媒介性や媒介性は従属させられたもの

いかにして媒介的なものと無媒介的なものを同時に侵犯するのか。

おそらく、メジャーなエクリチュールによって、侵犯は可能ではないか。

中性的なもの/の侵犯と *Aufhebung* の転位 *La transgression du neutre et le déplacement de l'Aufhebung.*

41. 中性的なエクリチュール (580)

古典的な意味でのさまざまな対立関係の彼岸にある至高性のエクリチュールとは、白いエクリチュール、中性的なエクリチュールか。

Cf. 「文学から解き放たれようというこれと同じ努力にはまた、今ひとつ別の解決法がある。それは、言語の痕跡をもった秩序への一切の隷従から解放された白いエクリチュールを創造することである。

Dans ce même effort de dégagement du langage littéraire, voici une autre solution : créer une écriture blanche, libérée de toute servitude à un ordre marqué du langage.」(バルト『零度のエクリチュール』)

neutre (中性的) =ne (否定) +uter (二つのもののうちのひとつ)

弁証法：あれもこれも キエルケゴール：あれかこれか

中性：あれでもなく、これでもない →バタイユ、ブランショ

42. 侵犯の否定かつ肯定的側面 (580)

中性的なものとは本質的に否定的なもので、侵犯の否定的な局面がある。

至高性は、その言説内で古典的論理のあらゆる矛盾ないしは対立を中性化してはいるけれども、それ自体としては中性ではない。

言説と中性化の労働までを用いて体系を構成している法則あるいは禁忌を体験のなかで、(肯定的に) 侵犯する。

43. 言説の破壊 (580-581)

言説の破壊≠抹消による中性化

語を増幅させ、衝突させ、終わり＝目的なき置換へと蕩尽してしまう。

意味の外の賭けの至高な肯定がその唯一の規則

44. 議論の確認 (581)

ここまでの行論で肯定されたこと

- ・賭けの規則、規則としての賭け
- ・言説を侵犯し、倦怠という否定性を侵犯しなければならないという必要性

45. 言説と法の侵犯 (582)

「だが、この言説の侵犯(そして、それゆえに、これは法一般の侵犯でもある。なぜなら、意味の規範ないし価値、すなわち合法性一般の境位を指定することによってしか、言説は指定されないからである)、これもまた、あらゆる侵犯と同様に、みずからが超過する対象を何らかの仕方で保持し認証しなければならない。Mais cette transgression du discours (et par conséquent de la loi en général, le discours ne se posant qu'en posant la norme ou la valeur de sens, c'est-à-dire l'élément de la légalité en général) doit, comme toute transgression, conserver et confirmer de quelque manière ce qu'elle excède。」(582)

「この操作のヘーゲル的性格を強調するまでもない。この操作は、Aufhebung(維持しつつ乗り越える)という翻訳不可能なドイツ語の動詞によって表現される弁証法の契機に対応したものである。Inutile d'insister sur le caractère hegelien de cette opération, qui répond au moment de la dialectique exprimé par le verbe allemand intraduisible aufheben (dépasser en maintenant).」(『エロティシズム』)

46. 問題提起 (582)

Aufhebung: 奴隷の勝利と意味の構築を表象するもの

だとすれば、バタイユがすんなり認めてるように、Aufhebung にもとづいて、侵犯の運動を理解できるのか。

47. 異議提起 (582-583)

バタイユに抗してバタイユを解釈し直すこと

バタイユは彼自身がそう思っているほどヘーゲル主義者ではない。

48. 禁忌と侵犯の運動と Aufhebung (584-585)

Aufhebung：意味作用の言説や体形や労働の内部で生じる営み。絶対知の円環のなかに収められており、言説、労働、意味、法などの全体性を中断させはしない。ある禁忌から別の禁忌への移行の形式、禁忌の循環、禁忌の真理としての歴史。

→バタイユ：禁忌と侵犯の運動を説明するのに、「Aufhebung の空虚な形式を類比的に利用するしかなかった」。限定経済の円環のうちにある、自然な意識、隷属的な意識にとどまってしまうのではないか。

49. エクリチュールが書物を侵犯する地点 (586)

ヘーゲルの言説も、コジェーヴがいう〈書物〉も、奴隷の言語、労働の言語で書かれているかぎり、反動的な運動としても革命的な運動としても読まれうる。→エクリチュールによる書物の侵犯

50～ 絶対知の組織＝織物の外へ (587-)

「したがって、絶対知の通俗的な組織＝織物と、死を招く目の開きがある。テキストと眼差しが。意味の隷属性と死への覚醒が。マイナーなエクリチュールとメジャーな光が。Il y a donc le tissu vulgaire du savoir absolu et l'ouverture mortelle de l'oeil. Un texte et un regard. La servilité du sens et l'éveil à la mort. Une écriture mineure et une lumière majeure.」

Cf. 本論における文学や文学者の不在：参照されるバタイユの文学作品は『小さきもの』のみで、ヘーゲルに関する『マダム・エドワルダ』さえ言及されていない。(岩野卓司、前掲論文)